鞠智城

ところで、『続日本紀』巻十（文武二年（六九八）五月二十五日条に

「大宰府を置きて大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ」

と記されている。（『荒筋』第三編【防備】において既述）

通常の常識からいえば、肥後国の菊池は、後国（大和国）への道筋からはるかに遠く離れており、――日本国の防衛という観点から見るとき、『鞠智城』などのような価値があったのか、大いに疑われる。

そして、肥後国の菊池が、戦線から懸け隔たった、辺地にすぎないのであれば、

《そもそも、『鞠智城』を築く必要など無かったのではあるまいか》

と思われる。

だが、『日本書紀』や（その他の書籍）に表だって記述されていないものの、実はこの当時、高市天皇（舒明上皇）は、肥後国の菊池に拠点としての

HS. 2. 13 (金) 夜休み 10
→ 続日本紀(6) 1-未2P 左下 (古)469P
563.11.24 木 (古) 4534P-1/4
(古) 4532- -1/3 7P 近隣 (古) 453611

「鞠智城」

山城を築かれたのであろう≫

と想像される。

すなわち、

つまり、

1 大倭国（九州）の北方の玄関口にあたる大宰府に、「大野城」。「水城」。「椽城」等を築き、近辺を

2 さらに、菊池に、大倭国の本拠地としての「鞠智城」を築いた、（九州）

（ように推察される。（第512図〈神籠石分布図〉参照）

31巻766頁

なるほど、「鞠智城」の築造年代は定かでない。

しかし、「続日本紀」の記述は、――大野・基肄・鞠智の三城が、ほぼ時を同じくして築かれたことを強く示唆しているようである。

白村江での大敗直後、大倭国（九州）の守りを固める為、これら三城が築かれたのであろう。

米

真っ先に

さて、熊本県菊鹿町の台地に、土塁・城門礎石等を備えた朝鮮式山城の遺構があって、これが「鞠智城」である、とみられている。（「続日本紀」現代思潮社、第一分冊末の二頁注三四

参照）

その台地は、隈府と鹿本町との間に位置しており、南に菊池平野が広がる。

北方は山岳重畳し、八方ヶ岳・鳳儀山・女軒岳・深葉山等あり、東方には鞍岳があって阿蘇山に連らなる。西南に米野山（三一二㍍）。国見山（三八九㍍）・木葉山（三八三㍍）等が点在し、――まさに肥後北部の奥座敷という。

隈府の西北方三㌔の高台一帯が米原集落と呼ばれる所で、ここが鞠智城跡（県史跡）である。直径三㌔にわたる自然の地形を活かした朝鮮式山城である。長者原・宮野などで建物の礎石群を発掘したが、現在では再び地中に埋められた。

そとまわりは断崖や土塁がかなり残存している。南の堀切集落に降りると、大きな城門の礎石が、木野神社の鳥居下や竹林のなかにみられる。（「熊本県の歴史散歩」熊本県高等学校社会科研究会、山川出版社、四三頁参照）

（一〇五二㍍）

460

コクヨ　ケ-20　20×20

先述の通り、『豊前国風土記逸文』に、こう記されている。

「或書に曰はく、豊前の國宇佐の郡（の）菱形山（の）廣幡八幡の大神〈＝応神天皇〉、郡家の東、馬城峯の頂に坐す。

後の人皇四十五代聖武天皇の御宇、神亀四年（七二七）歳、丁卯に次るとき、北の山（＝馬城峯）に就きて神の宮を造り奉る。

因りて、廣幡八幡の大神の宮と名く」

とある。（「荒脛」第二編『八幡神』において既述）

おそらく、

〈応神天皇は、東国宇佐郡の『馬城峯』の山頂を居城とし、千余里の海の向こうの〈拘奴國〉と対峙しておられたのだろう〉

と思われる。（第2図参照）

この様な『倭人の祖先達の慣例』に従い、

（高市天皇（舒明上皇）は、藤智城の西側に連なる山稜（山の尾根）中の高所に『涼みヶ御所』をお造りになった。）（第489・490・491・492図参照）

因みに此処から（第491図の等高線参照）南の尾根の西側部分は、急な絶壁状。

（この絶壁状部分の木々は、根際から切り払われていたと思われる。）

西側の尾根上には、巨大な石がごろごろと並んでいたことだろう。

・もしも敵軍が、断崖を攀じ上ってきた時には、一人で転がせるくらいの石を、崖下へ向かって押し出してみるがよい。

・顔面蒼白となった敵の兵らは、なす術も知らず、右往左往するに相違ない。

なお、御所とは、天皇の御座所のことである。

『涼みヶ御所』は、高市天皇（舒明上皇）の御所として造られたのだろう。

（462）

・カラー 1頁の全面に
・上下に限度一杯は み出
して掲載
下さい。→この建物をはぶかないで下さい。
(注) 4,537P-3/4の八角建物と見比べ
ずいよう、右良に配置した。
463P
4,535P-1/4
4,699P-1/2 まで天地をはみ出して
4,699P-1/2 21行
463
(第11巻)

鞠智城跡は、内城地区(55ha)と周辺部を取り込んだ外縁地区(65ha)から成る。総数64棟の建物跡や、約5300㎡の貯水池跡が検出されたのは内城地区である。この復原画は鞠智城の第2期(8世紀)で、八角形建物や、米倉、武器庫、兵舎、管理的建物が認められる。八角形建物は最上階に通信用の太鼓を置いた鼓楼説が有力である。熊本県では、平成6年度(1994)から鞠智城跡の整備事業を進めており、この復原図も県提供の資料図面を元に作成したものである。

第489図　鞠智城

・西北方の尾根上に立派な建物(涼みヶ御所か)が見える。(八角形建物は、次頁のように2棟ある)

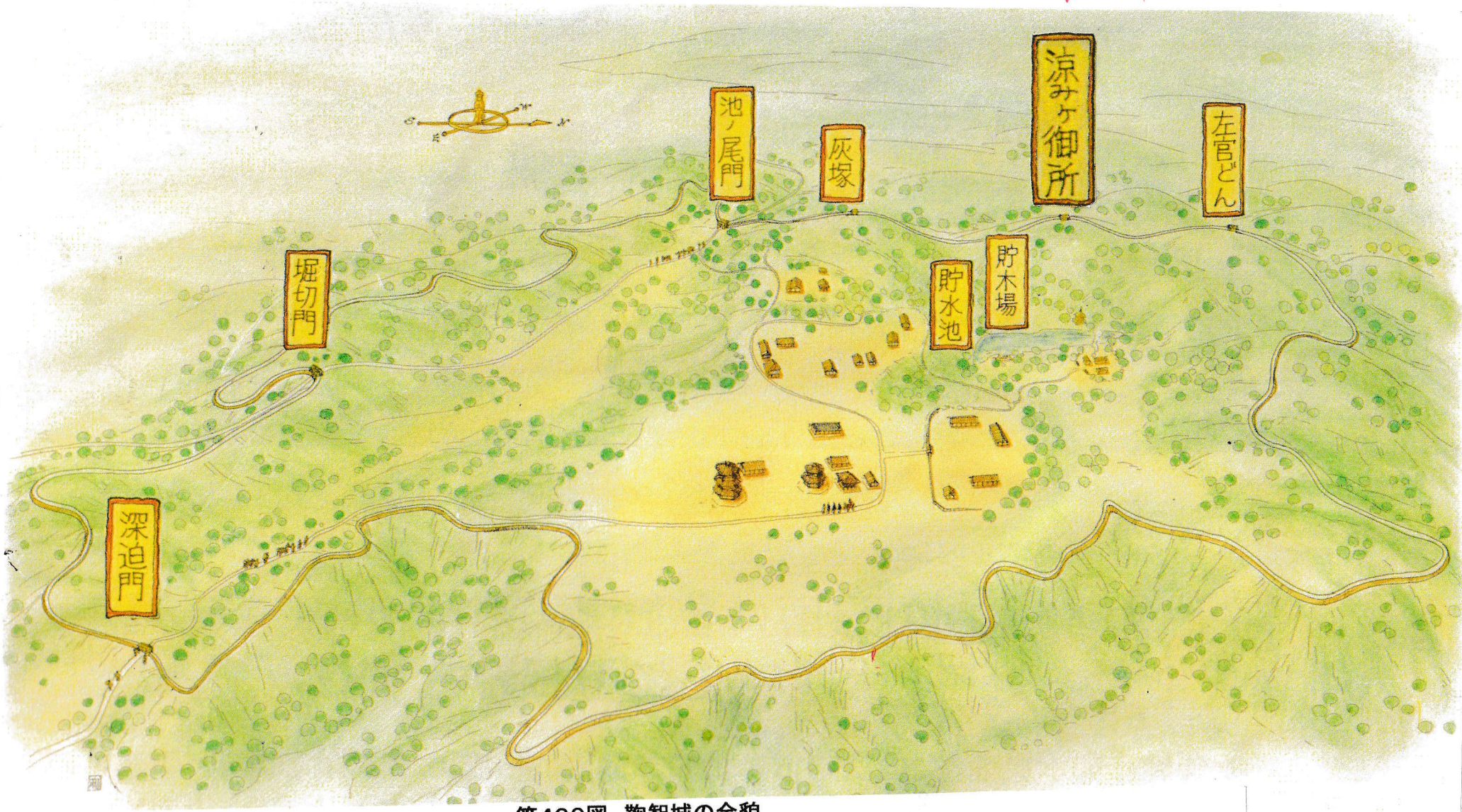
『図説熊本県の歴史』平野敏也、河出書房、1997年11月10日発行、6頁参照。

295

・カラー左頁の上半分、左右に大きくはみ出させて下さい　4,535P 2/11

大きな字 この枠内を、他と同様、明るくして下さい。

A3を折り返したもの一枚のパンフレット



第490図　鞠智城の全貌

・鞠智城は、周長約3．5Km、面積約55ha、標高90～171mである。城域の中央付近では、八角形建物（2棟）をはじめとする72棟の建造物跡や貯水池跡などが、外周では、城門跡や土塁跡などが、相次いで発見された。（高市天皇。高市皇本宮に天の下知らしめし天皇）（17巻1－2、皇極紀2年9月6日条。紀下248頁）

・【涼みヶ御所】は、天皇の御座所として作られたのではなかろうか。

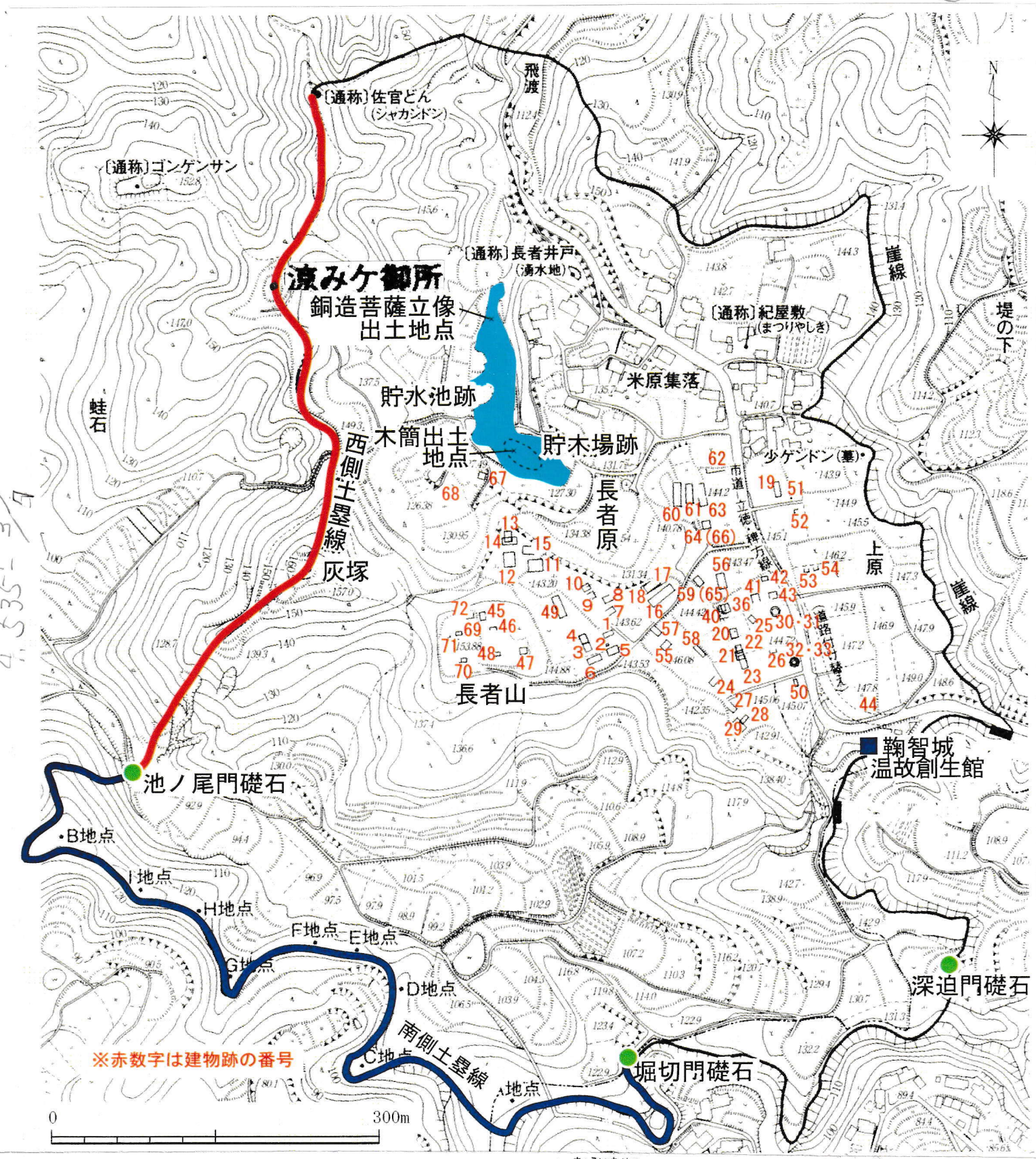
『鞠智城のあらまし』「ここまでわかった鞠智城第1号」の末頁参照。

（舒明天皇の重祚）

(296)

（第11巻）464

・カラー
・右頁全面に大きく掲載下さい。

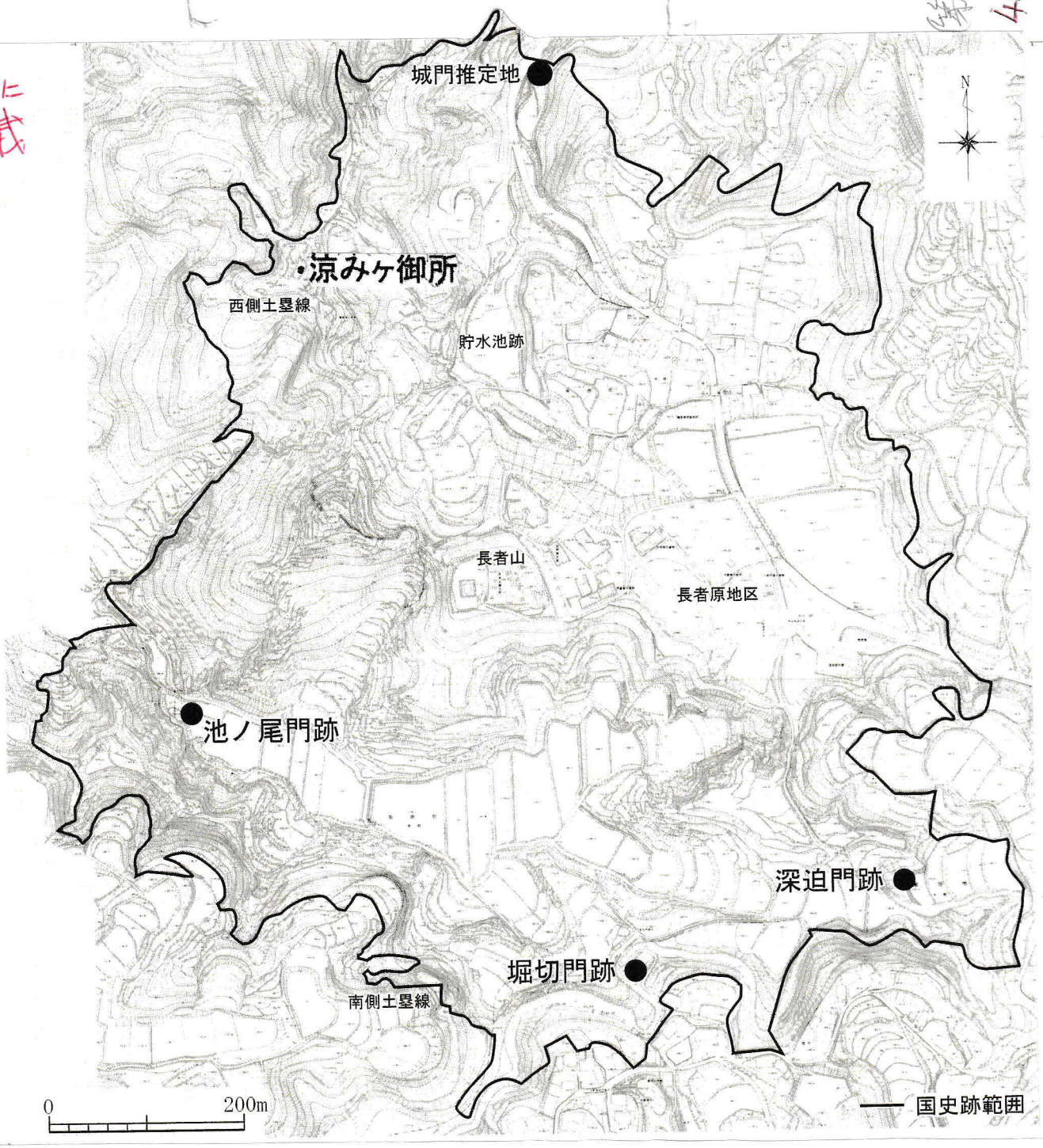


第491図　鞠智城跡全体図（狭域説）

・八角形建物（30・32）は、共に1回の建て替えが行なわれている。
・西側土塁線の西方斜面に生えていた木々は、全て、根元から切り払われたのだろう。

『鞠智城跡』（Ⅱ）熊本県教育委員会、平成24年3月23日発行、第1図、65～69頁。他参照。

・カラー
・左頁全面に大きく掲載して下さい。



第492図　鞠智城全体図（広域説・国史跡範囲）

・鞠智城広域説は、鞠智城狭域説よりも、西側へ張り出している。
・鞠智城の役目が終わった時、西側の尾根上に整然と並らべ置かれていた巨石は、全て、崖の下へ突き落されたのかも知れない。

『鞠智城跡』（Ⅱ）熊本県教育委員会、平成24年3月23日発行、340頁参照。

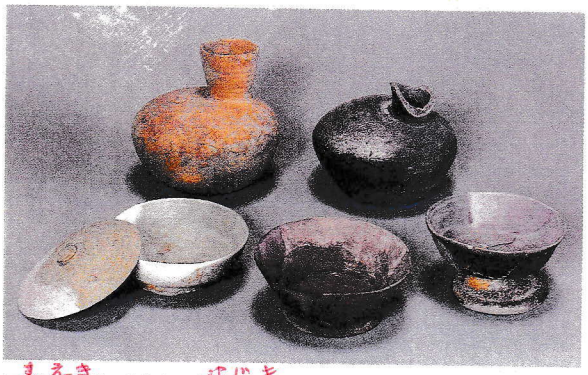
・カラー
・右頁に大きく掲載お願いします。
・文字を、ゴチに変えて下さい。

出来るだけ、明るくして下さい。

■銅造菩薩立像
ややふくみを帯びた顔立ち、三面宝冠、垂髪、天衣などがよく表現されている。その前で舎利容器と考えられる持物を捧げ持ち、やや腹部を突き出した姿態は、横からみると優雅なS字曲線を描いている。その大きさ（12.7cm）から、念持仏と考えられる。

■1号木簡
墨書で「秦人忍□五斗」と書かれている荷札木簡で、上部には左右から切り込みが入れられている。この切り込み形状は、大宰府管内の木簡に見られる。

■軒丸瓦
鞠智城跡からは、平瓦、丸瓦、軒丸瓦が出土しており、その中でも軒丸瓦には、単弁八葉蓮華文と呼ばれる文様が施されている。



■須恵器（左）と土師器（右）
須恵器はロクロで成形し、窯を使用して高温で焼かれた硬質の土器であり、土師器は素焼きで低温で焼かれた土器である。須恵器は固く焼きしまり水漏れしないなどの特徴がある。一方、土師器は熱に強いため、鍋、甑など煮炊きに使われるものが多く見られる。

■木製品（鍬と木槌）
木製品は貯水池跡から出土しており、建築材とともに出土した。鍬、鋤、斧の柄などが保管されていましたが、これらは粗加工までが終わったもので、本来は、建築材を使う際に最終的な加工を施し、工具として使用する予定であったものと考えられる。

写真図版 718 鞠智城跡出土の遺物

『鞠智城』鞠智城の築城と その変遷 （報告書『鞠智城跡Ⅱ』の内容を、分かりやすく紹介するために作成した資料）、熊本県教育委員会、5頁参照。

4,535P-6/7

・カラー
・左頁の上半分に大きく掲載。
・下方に、次頁の『軒丸瓦』の図は入らないでしょうか。
・文字を、ゴチた変えて下さい。

■八角形建物跡（32 号建物跡）
中心に直径 90 cmの心柱を据え、その周囲に八角形に配置された柱が三重に巡っています。

■貯水池跡貯木場
貯木場からは、建物の建設に使う木材や、斧の柄や鋤などの木製農工具が出土した。

■版築土塁
土を何度も突き固めることで強固な壁をつくる「版築」という大陸伝来の土木技術を使ってつくられた土塁です。

■池ノ尾門跡（水門）
鞠智城跡で唯一、石積みと水門が見つかりました。
幅 9.6mの石塁で谷部を塞ぐようにトルコ構築し、防御施設としていました。

写真図版 719 鞠智城跡出土の遺物

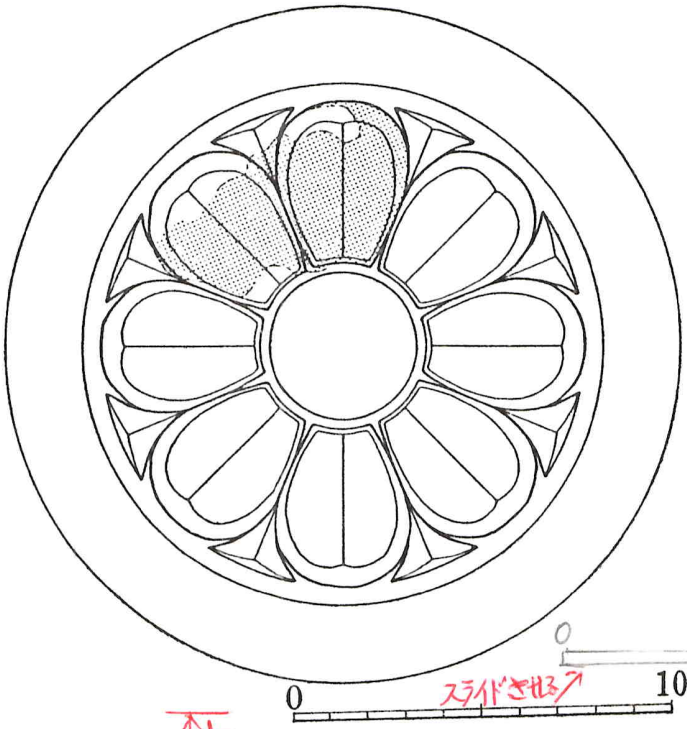
『鞠智城』鞠智城の築城と その変遷、 熊本県教育委員会、4頁参照。

300

(第1巻) 468P

・白黒
・左頁の下方に
入りませんか？

4,535P-7/7



上げる

14QG

第493図　鞠智城跡出土の『軒丸瓦』復原図（くくち　のきまるがわら）

トル
（『鞠智城跡調査報告書』菊鹿町教育委員会、1981）

13QG

『九州古瓦図録』九州歴史資料館〒柏書房〒昭和56年11月30日発行〒
252頁参照〒

12QG

・瓦は〒台地上や長者山などの数ヶ所で出土する〒
トル
年代は〒天智朝に比定される（みさだ）。
・鞠智城の軒丸瓦は〒天智朝の築城に伴う可能性をもち〒
トル
7世紀後半のものと考えられている〒

469

陣内廃寺（出土）の瓦　由 3,522P-4/4　5 と似ている？

楠々原 右上
瓦　由 4941P-1/2 21件

どう考えても、こんな奥まった所に、日本の防衛の為の山城が築かれたというのは納得しにくい。ただ、菊池平野を見おろしているだけの台地に、国運を左右する防衛的な価値があるようには思えないからである。

つまり、先にも述べたように、

《この台地に築かれた『鞠智城』は、高市天皇（舒明上皇）の居城だったのであろう》

と推察される。

兵達は、この鞠智城を死守する為に厳しく十重二十重に取り囲んだことであろう。

そして、北方の玄関口に相当する大宰府近傍の『水城』、『大野城』（大城）、『椽城』をさし固めただけでなく――西の有明海の出入口である島原と天草との間の『早崎海峡』には、多数の軍船を配備し、非常時に備えたと想像される。

当然これらの軍船は、《敵戦に敗れたふりをし敵の船隊を湾内の奥深く誘導せねばならない》（溺手）もっとも、天智称制二年（六六三）の白村江での大敗北以来、高市天皇（舒明上皇）は胸苦しいばかりの無念の思いを抱いておられたに違いない。

八角形建物 あ4535-2/7 い4532-2/3 4行 堪え難い 元1354 楯籠る 元1385 う4529 4533 1行 鞠智城

―かも、『鞠智城』にひっそり『楯籠』らなければならなくなった高市天皇の悲しみは、どんなにか、堪え難いものであったろう、と拝察される。

*

トル

『大野城』や『稚城』が築かれた六五五年、おしくなその直後ころ『鞠智城』が創建されたのだろう。（既述）

『この『鞠智城』には、二つの『八角形建物』が従

い4535-1/7 471

え立っていたようである。（第489・490・491図参照）

『一方、『前期難波宮』（六五二～六八六）

う419『八角形建物跡』（参照）

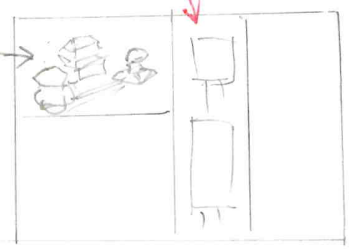
にも、二つの『八角殿』が有ったという。（「古代日本と朝鮮の都城」中尾芳治、ミネルヴァ書房、二〇〇七年三月二〇日発行、四九頁末行～五三頁、第494・495図参照）

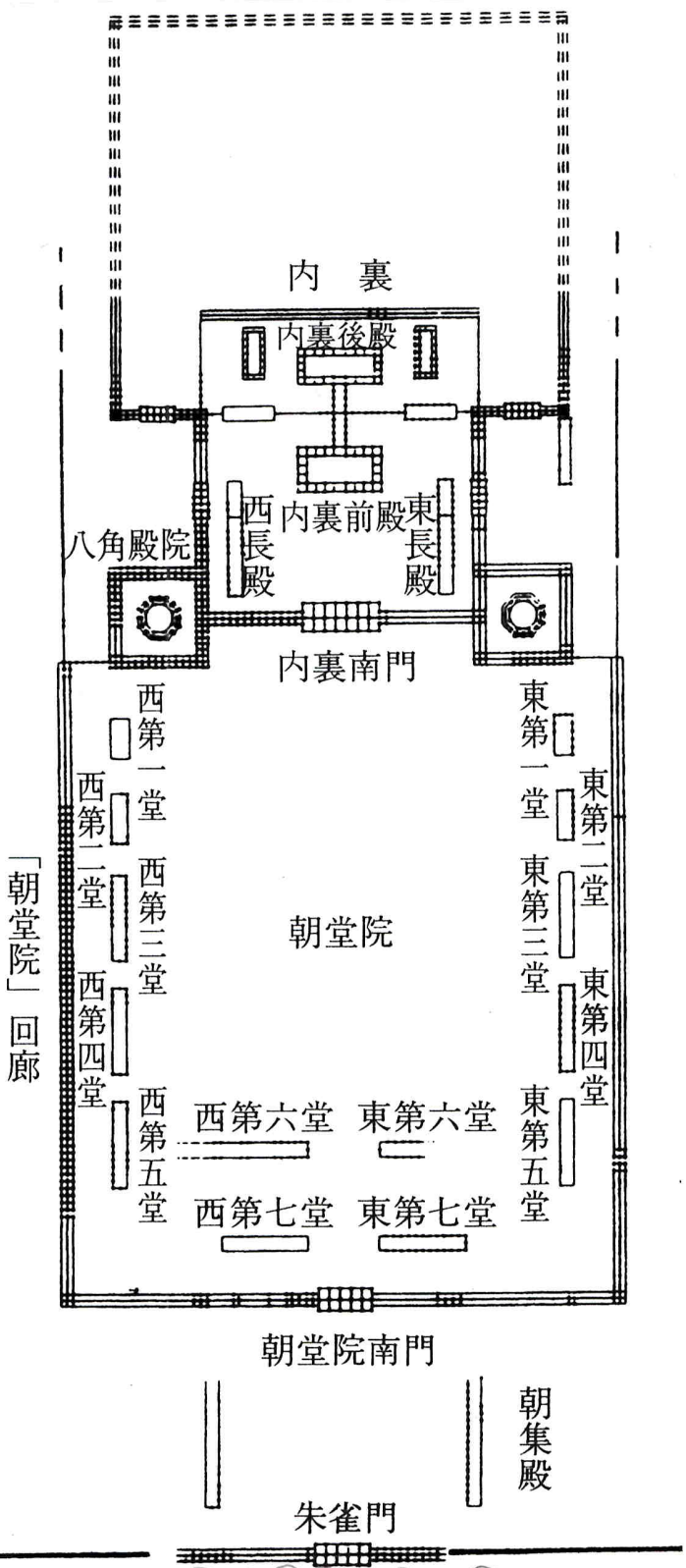
『鞠智城』の『八角形建物』と、『前期難波宮』の『八角殿』とは、『いくぶん似た構想』である

ように見受けられる。（要検討）

右頁の左側上下にわたって、細長く掲載下さい。

次頁の図





14QG

第494図　前期難波宮遺構配置図

13Q4

『古代日本と朝鮮の都城』中尾芳治、ミネルヴァ書房、2007年3月20日発行、52頁参照

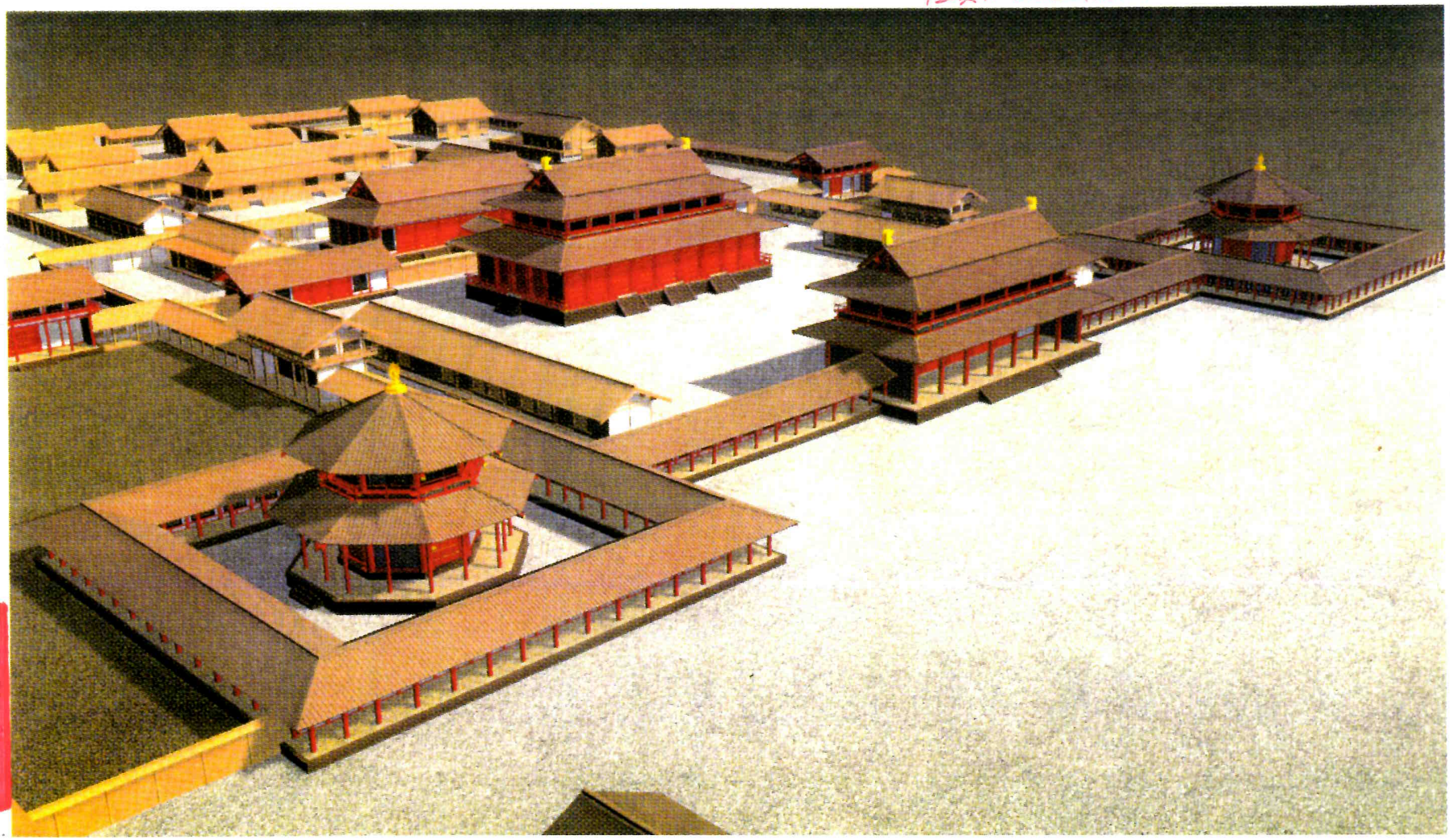
4,537ﾌﾟﾚｰﾄ 3/4　(注) 4,535ﾌﾟﾚｰﾄの八角建物と見較が易いよう、左頁に配置したい。

・カラー

・左頁の上半分に、左右を大きくはみ出して掲載下さい。

・出来るだけ鮮明に、明るくお願いします。

・次頁のように、文字5ヶ所と引出し線を記入して下さい



13QG

14QG

第495図　CG（コンピューターグラフィックス）による前期難波宮（なにわのみや）中枢部（ちゅうすう）復元図（ふくげんず）

・『難波宮跡（なにわのみやあと）』植木久（うえきひさし）、同成社、2009年6月25日発行、口絵の2頁。

←手持ちの本

・『古代日本と朝鮮の都城』中尾芳治（なかおよしはる）、ミネルヴァ書房、2007年3月20日発行、53頁参照。

12QG

・曹魏（そうぎ）時代の「闕（けつ）」（門（もん）の外（そと）に設（もう）けた双闕（そうけつ））が、我が国へ導入（どうにゅう）され、独自（どくじ）の変貌（へんぼう）を遂（と）げ、八角円堂（はっかくえんどう）になったのだろうか。

12QG

473

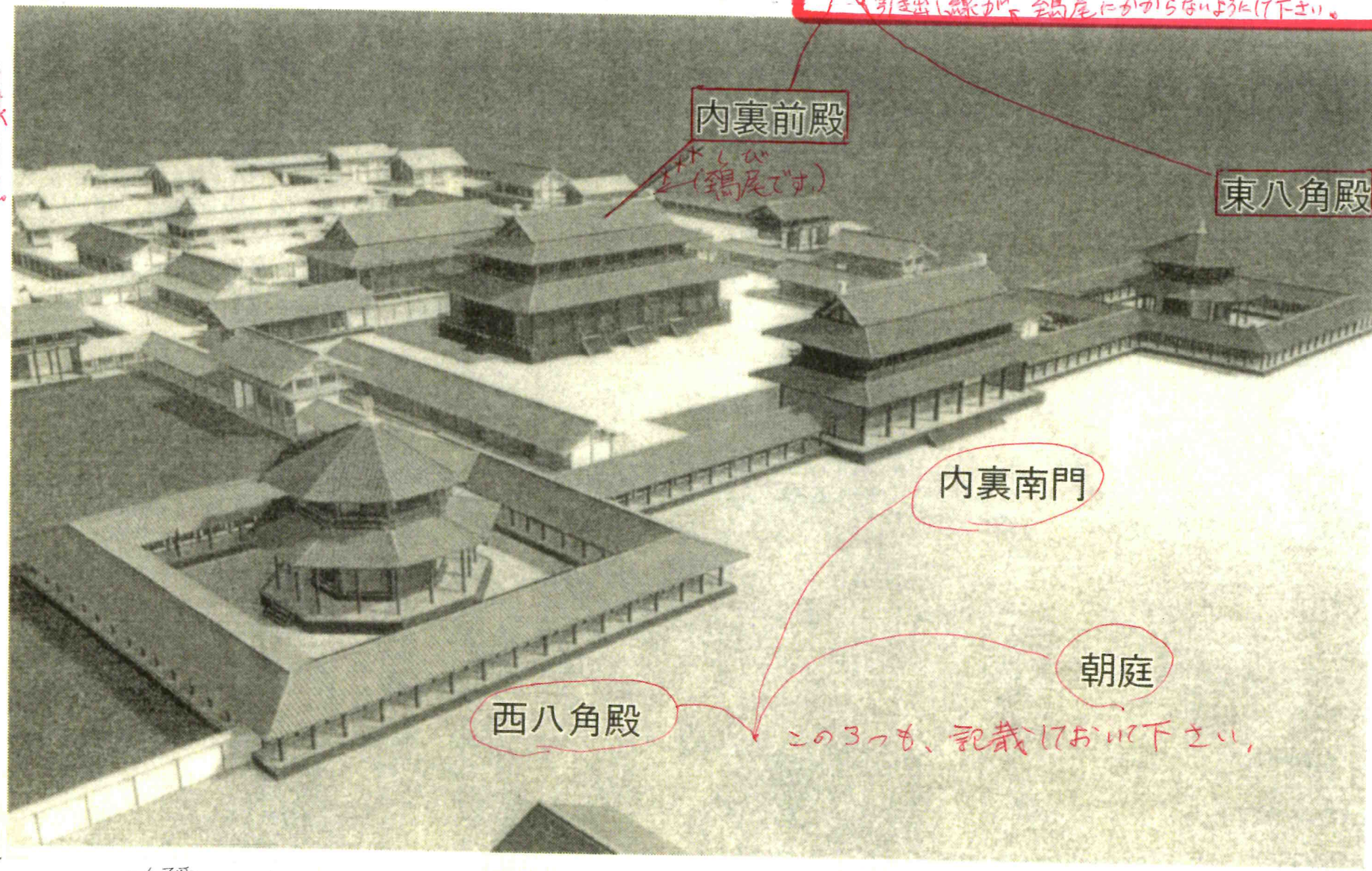
あ4387 17行　い4348 15行　う1317 2/9

＊参考図（この図は、掲載不要です）

4,537字 − 4/4

＊長方形の白抜きにし、その中に黒い文字を打ち込んで下さい。
引き出し線が、鴟尾にかからないようにして下さい。（2ヶ所）

・左側の上半分に左右を大きくはみ出して掲載下さい。
・出来るだけ鮮明に、明るくお願いします。



~~第1図~~ CGによる前期難波宮中枢部の復元（「古代都市誕生」展図録所載）

『古代日本と朝鮮の都城』中尾芳治（なかおよしはる）、ミネルヴァ書房、2007年3月20日発行、53頁参照。（白黒）

唐の郭務悰ら、再来日、

やまとのくに
大倭国（九州）で、このような防御施設が次々と築かれているある日……

……またまた唐の軍船がやってきた。

天智紀称制四年（六六五）九月二十三日条に、

「九月の庚午の朝壬辰（二十三日）、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等を遣わす。

[改行]

[ら]

[不]ここに等というのは、右戎衛郎将上柱国百済禰軍と朝散大夫柱国郭務悰とをいう。計二百五十四人である。七月二十八日に對馬に至る。九月二十日に筑紫に至る。二十二日に表函を進る」

とある。

【タイトル】

[削]昨年（天智紀称制三年五月十七日）に引き続いて、郭務悰らが再びやってきたのだった。

恐らく、劉徳高・郭務悰等は、

めんかい 会 2178P 人と会うこと

紀下364P

由4537P 3/419a 貼

由4521P 上表文をおさめた函と、さげ物とをたてまつった

拝謁 1759P 郷大津 紀下348P 11行

・七月二十八日に、対馬に至り、
・九月二十日に、筑紫に至り、
・九月二十二日（あるいは二十三日）に、郷大津を遣わす、
また は大宰府において、高市天皇に拝謁した、

ということなのであろう。

＊なお、本文では「壬辰（二十三日）」に使者を遣わす」とあり、注記では「二十二日に表函を進る」とあって、日付に矛盾がある（「日本書紀」（下）日本古典文学大系 三六四頁 注五参照）（要検討）

二十日に上表文を納めた函を（朝臣に託して）進った。
二十三日に使者を（天皇のもと）遣わした。
という意味なのではなかろうか。

二 二年目

ともあれ、筑紫に至った、二年目の前から行幸され、――筑紫国の郷大津、筑紫国（肥後国）高市天皇（舒明上皇）は、大倭国（大倭国）の前から行幸され、――筑紫国の郷大津、もしくは大宰府において、唐からの使者達と面会されたのであろう。

＊もっとも、唐から来た客人らに、各種の防衛施設を（あらいざらい）見せることになってはいけない。

*『水城』を避けて(12.5cm)『大宰府の地へ』客等を案内したのであろうか。

十月十一日に、菟道で、大がかりな閲兵を行なった。(紀)

なお、ここに記されている『菟道』は、京都府宇治市のそれではなく、――大宰府の『有智山』あたりのことであろうと思われる。

第二十五章〈風流島〉の項において述べたように、

『筑前国筑紫郡太宰府町大字内山あたりの[illegible]

[illegible]を、古代においては『有智山』と称していたL

という。(「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版、二二四頁〈内山〉参照)

十一月十三日に、劉徳高ら[illegible]饗宴を賜わった。

十二月十四日に、劉徳高らに物を賜わった。

是の月に、劉徳高・郭務悰らは罷り帰っていった。(紀)

とすれば、天智称制四年(六六五)当時、大宰府の『有智山』あたりに、何等かの施設があったのだろう、と推察される。(後述)

(*)

大倭国（肥後国）の高安城（高市天皇五年築城）

倭国（大和国）の高安城（天智称制六年築城）

『続日本紀』文武二年（六九八）八月二十日条に、

「高安城を修理す。天智天皇五年の築城なり」（六六六）

と記されている。

ところが、『日本書紀』天智称制六年（六六七）二月是の月条には、

「倭国の高安城・讃吉國の山田郡の屋嶋城・對馬國の金田城を築く」

とある。

つまり、『高安城』の築城時期について、六六六年・六六七年の二説があって一年の齟齬があるように見える。（舒明上皇）

しかし、この物語においては、

①唐・新羅の艦隊が、玄海灘から天草灘へ迂回し、攻めて来た時に備え、高市天皇は、大倭国（肥後国）熊ノ岳の山塊南端部にあって有明海を一望のもとに見わたせる秀麗

な高峯（現在の金峯山、六六五㍍）の山上に「高安城」を築城されたのだろう。（写真図版171）

・そーて、大倭国（肥後国）に、この「高安城」が築かれたのは、天智称制五年（六六六）のことだったのであろう、と考えたい。

図一方、天智称制六年三月に即位された天智天皇は、倭国（大和国）の生駒山地南端の高峯「高安山」（四八八㍍）の山上に、「高安城」を築城されたのであろう。（写真図版734）

第511図 高安山近傍図 参照

・そーて、倭国（大和国）に、この「高安城」が築かれたのは、――天智称制六年（六六七）十一月のことだった、であろう、と考えてみたい。

すなわち、

「高安城」は、倭国（大和国）だけでなく、大倭国（肥後国）にも築かれた、

と推察される。

但し、ここで多くを述べると煩雑になるので、第八十四章へもう一つの高安城の項において詳述したい。㊍

（右端の山 第12図 金峰山 参照）

中大兄、大和国から郡大津へ向かう

天智紀称制五年（六六）是の冬条に、

「京都の鼠、近江に向きて移る」

とある。

たぶん、

●あそこらへん

「鼠」とは人々のことを指していうのであろう。

●また、近江の「琵琶湖」は筑紫の「博多湾」に相当する、といえよう。（既述）

つまり、

〈近江国は、筑前国に相当する〉

と解して、この物語を書き進めてゆきたい。

なお、皇太子中大兄らの一行は、倭国（奈良県）から近江国（滋賀県）の方に向かって移ってゆき、ーーーー泉川（木津川のこと）の船着き場から川を下り、瀬戸内海を漕ぎ渡って大倭国（恃後国）へと急いだのではなかろうか。

「そして後の翌年春に高市天皇がお隠れになり

ーー中大兄は、天智称制六年（六六七）三月に即位し、三月十九日に都を（近江国の大津に

4543P

相当する所（＝）博多湾南岸の「那大津」に定められることになるのであろう、と推察される。（追って詳述したい）

米

2 すでに述べたように、宮崎康平はこう言う。

「元神朝といわゆる倭の五王時代までは、記紀の文中に、近淡海、近江国とよばれている所を、従来のように千カツアフミと読むのはよいが、滋賀県の近江と理解してはならない。――――近江の記事を筑前の物語と置き換えて解釈すれば内容が容易に、しかもきわめて自然に納得できるのである」

という。（「まぼろしの邪馬台国」宮崎康平。講談社、一八三頁参照）

四 この物語では、後の五王の時代以前だけでなく、――――天智朝・天武朝の記述においても、筑前国の名を、「近江国」と称している場合が多々ある〉と解したい。

米

奈良山を越えて

それは、天智称制五年（六六六）の冬のことだったのではなかろうか。

倭国（大和国）の都を後にして、奈良の山（奈良市の北方の丘陵地）を越え、泉川（木津川の古称）の船着き場へと向かう貴人達の一行があった。

奈良の山の山道を、曲り曲って登ってゆき、ながらく――――曲り角ごとに眺めやるとかなたに飛鳥あたりの森や林が見えた。

遠い西の国へ行ったら、一体、何時この倭国（大和国）へ帰って来れるだろうか。

額田王は、大和国の美しい景色を心の内に刻みつけるかのように見はるかすのだった。

円トル

ここに、額田王は歌を作り、透き通る声で歌った。

こた 知える ⑧4546P 16行

かなた 彼方 438P

HV 4545P — 1/3

万1-19P 注17

みさ下①-19P 見放く

味酒 三輪の山、あをによし 奈良の山の 山の際に 隠るまで 道の隈い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さふべしや

〈大意〉三輪の山よ。奈良山の間に隠れてしまうまで、道の多くの曲り角ごとに、よくよく見て行こうと思う。しばしば眺めやろうと思う。——それなのに、その山を、無情にも、雲が繰り返し 隠してよいものであろうか。（万巻一一七）

「何と美しい歌なのだろう」

額田王が見詰めている視線の先には、雲に見え隠れしている三輪山があった（写真図版220〈三輪山〉や第496図〈額田女王〉参照）。

皇太子中大兄は、その三輪の山を、同じく感慨深げに御覧になった。

とその時、皇太子中大兄は、額田王の歌に和えてやりたいとお思いになり、——井戸王

4,545 P – 2/3

・カラー
・右頁の上半分限度一杯左右にはみ出して掲載下さい。

写真図版 720 北の方から、南の三輪山(みわやま)を望(のぞ)む。

『奈良県の山』小島誠孝(こじままさたか)、山と渓谷社、2010年5月10日発行、32頁参照。

←A3。コピー（同名の本2冊）

・カラー
・左頁全面に、
大きく掲載下さい。

・文字・星・白線を全部トル
・背景がきたなり。

背景を全て右上のブルーでベタにしておいて下さい。

485

トル

4,545ヤ－3/3

第496図 額田女王（ぬかたのおおきみ）←要付ルビ有る。（上村松篁）

『額田女王』井上靖（井のうえやすし）↘新潮社↘昭和47年12月25日（2刷）発行↘カバー参照↘。

ことばがき 元明の詞書 和歌のはじめの説明文
ことばがき 詞書 左注
採用 日本古典文学大系 936P
4546P
万1-20P 注18

を招き寄せると、何事かをお命じになった。

こうしてやや あって、皇太子や中大兄の声が①奈良山の上に流れた。

反歌

三輪山を しかも隠すか 雲だにも
情あらなも 隠さふべしや

〈大意〉なつかしい三輪山を、なぜそのように隠すのか。せめて雲だけでもやさしい情があって欲しいと思うのに、そのように隠し返し隠すということがあるものか。〈万巻一一一八〉

なお、万巻一一一七～一一一八の歌についての冒頭の詞書に、

「額田王の近江国に下りし時作る歌、井戸王すなはち和ふる歌」

とある。

だから

ぬかたのおほきみ
「額田王が最初の歌

うまさけ みわ やま
「味酒 三輪の山

あをによし ならやま
青丹よし 奈良山

の ～～～」

を作り、次いで井戸王がこれに和える

OK

なのおほつ
娜大津 紀下348P

4547P

667年 ○○5年 天智 即位は6年3月 ㊥4505P

歌を作った〉

というようなのように解される。

■ところが、万巻一一八の反歌の次に付記されている左注には、意外なことが述べられている。

「右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を近江國に遷す時に三輪山を御覧す御歌そ。日本書紀に曰はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯に遷すといへり」（十九日）

ここに、「御覧す」とあるが、

〈「御覧す」という言葉は、天皇や皇太子にのみ使ういい方である。だから、この歌は当時の皇太子、つまり中大兄の作である〉

と見る説がある。〈「萬葉集」㈠日本古典文学大系、岩波書店、二〇頁注一参照〉

■しかし、あるいは、

「二首の歌は、都を〈近江国大津に相当する〉筑前国娜大津へ遷す時に、額田王と井戸

王が作った歌である。――とはいえ実は、皇太子中大兄が〈額田王と共に三輪山を御覧になった時の御歌である〉

という意味なのかも知れない。

■そこで、題詞（左注）ではなく、

〈額田王の歌に和えて、皇太子中大兄の心の内の思いを、井戸王が歌にしたのであろう〉

と推察してみたい。

＊

■つぎの万葉一一一九は、度々述べた□線へ

そがたの
麻形乃□の歌である。

・ヘソがタでなく、ミワヤマと訓む説がある。

（「萬葉集」㈠日本古典文学大系、岩波書店、二〇頁、一九の解説参照）

・恐らく、三輪山を、□阿蘇のヘソ形の山□にたとえているのであろう

S63.12.6(火)
H9.3.18(火)

万(1)-20頁注19の末(こと)

4.548P-2/2

前20行あけ

万1-21P

御諸(みもろ)の神(かむ)の山(やま)の狭野榛(さぬはり)の
衣(きぬ)に着(つ)くなす目(め)につくわが背(せ)
(大意)三輪山の林のとりつきに立つ野榛(のはり)
(一説に野萩(のはぎ))の色が、鮮(あざ)やかに衣(きぬ)に着(つ)くよ
うに、自分の目にくっきりとうつるわが背よ。
(万巻一一九)

三輪山山麓の野榛(のはり)(野萩(のはぎ))は、よく知ら
ていたのであろう。

それにしても、わが背(せ)とは、皇太子(ひつぎのみこ)中
大兄(おほえ)のことなのだろうか。それとも、大海人(おほあま)
皇子(みこ)のことなのであろうか。

定かではないが、この歌は額田王(ぬかたのおほきみ)の作とも
いわれている。(「萬葉集」(一)日本古典文学
大系、岩波書店、二〇頁、一九の解説参照)

万巻一一

489

(こと)

同母妹 紀下228P 1行

国4259P末〜
国4260Pに同文
令和13年に49才 国4256P

667 75才
−641 49
26 26

国4634P 3行

天つき改行

たけちのすめらみこと

高市天皇（舒明上皇）崩

先に述べたように、高市天皇（舒明上皇）は、天智弁制六年（六六七）二月末頃、お隠れになったのかも知れない。

尚、舒明十三年（六四一）に四十九歳であったとすれば、この時、七十五歳だったことになる。（第七十九章「舒明天皇」の〈譲位〉の項において既述〈巻末の〈保寿表〉参照〉）

天智紀弁制六年二月二十七日条に、迂狭を加えてみよう。

12,5 GM

「これより先、天豊財重日足姫天皇（母の斉明天皇）と間人皇女（舒明・斉明両天皇の女、孝徳天皇の皇后、中大兄の同母妹）とを、小市岡上陵（奈良県高市郡高取町車木）に合葬したが、是の日に、「皇孫大田皇女（大海人皇子の妃）」を陵の前の墓に葬った」

12,5 GM

〈天智天皇（皇太子中大兄）の皇女、大海人皇子の妃〉

なお、天智朝の記述なのだから、

「女大田皇女」（もしくは、大田皇女）

と記すべきであろうと思われるのに、

コクヨ ケ−20 20×20

「皇孫大田皇女」

とあって、異様な感じがする。

●表むきになるほど斉明天皇の「皇孫」大田皇女と理解させたいのであろうが、――しかし本来は今上天皇（高市天皇）の「皇孫」という意味合で記されているのであろう。

続いて、さらに注釈を付してみたい。

「高麗・百済・新羅・皆、御路に哀奉る。皇太子（中大兄）＜群臣に謂りて曰はく、我、皇太后（斉明天皇）天皇の

ことか）の勅したまへる所を奉りより、萬民を憂へ恤む故に、石槨の役（横穴式石室の墳墓の造営）を起さしめず。冀ふ所は、永代に以て鏡誡とせよ」とのたまふ」

●明白でないが、

高市天皇（舒明上皇）がお隠れになったので、高麗・百済・新羅が、皆、御路に哀奉ったく（から来朝している者達）のだろう。

●そこで、皇太子中大兄は、群臣に謂って、

「我、皇太后（斉明天皇）・天皇（高市天皇）の勅（みことのり）一たまへる所を奉りしより」と云々」と言われたのであろう、と想像される。

もしかしたら、天皇位にお即きになった順に、

「皇太后（斉明天皇）・天皇（高市天皇）」と記載されているのではなく、

定かでないが ㊍ もっとも高市天皇（舒明上皇）は、薨去されたのではなく、

「もはや、天皇としての地位から身を退いた（地位に耐えない）」と思し召しになり、中大兄らが東の大和国から上洛するのを待って、

〈皇太子中大兄に譲位された〉

おおば、ーーー本来なら、まわりから、中大兄に「譲位」

ともあれ、中大兄は、ついに即位されることになる。

H9.3.19(火)㊍
㊍455p 悪都を弘めばに失史多し
すいおう 紡肋
元1190p 車の筋道
天フキ改行 改行
4,549p-3/4
㊍4256p
㊍4505/12
㊍×259p-2/2 今上天皇 前頁にかかる
㊍ 得手も
492
コクヨ ケ-20 20×20

H9. 3. 19 (火)
H29. 4. 11 (火)～15
H30(2018) 11. 4(日)～11. 6(4回)
H31(2019) 4. 14(日)～4. 14(3回)
令和元(2019) 10. 1(火)～10. 4(3回)
令和2(2020) 6. 3(水)～6. 4(4回)

4.549ページ-4/4

※46:34ページ2行

ら上奏するのを待って、
皇太子中大兄に譲位された。
とも考えられる。
そこで、
高麗・百済・新羅から来朝している者達
および我が国の者達皆が、高市天皇の退位を
惜しんで哀しんだ。
のかも知れない。長期間におよぶ称制の時期を経て、
ともあれ、中大兄はついに即位されることとなる。天智天皇である。

高市天皇は、退位した後、再度、国史編纂事業に取りかかったようにも思われるが、仔細については分からない。
と記されている。
仁徳天皇即位前紀に、神天皇が、
天皇位に即かず、長い間、自ら
皇位は一日も空しかるべからずと謂ひき
と記されている。
中大兄が、天皇位に即かず、長い間、自ら
称制に甘んじられたなどとは考えにくい。(要検討)

493

コクヨ ケー20 20×20